

12. 私しか知らない空間

各務原市立八木山小学校6年

国本 梨花 山本 優乃

西山 直弥 黒川 勝海



敦賀市立中央小学校6年

阿部 真歩 白土 美咲 川端 日奈

「ふう。やっと終わった」

私は大きくため息をついた。

私の名前は山田憂亜（やまだゆうあ）。

みんなには憂（ゆう）ってよばれてる。

今日は残って係の仕事をしていた。

先生は職員室へ行っちゃったみたいで、薄暗い教室には、私一人しかいない。

「ようし、帰ろっと」

私は、帰ることを先生に知らせようかと思ったけど、（まあいいか）と、ランドセルを背負って玄関から出た。

「はあ、早く帰らないと。もっと暗くなっちゃう」

私は急いで校門まで歩いて行った。

「っと」

あたりが暗くて、落ちていた一冊の本を踏みそうになってしまった。

「おととと。あぶない、あぶない」

と、つぶやきながらその本を拾った。

題名は記されていない。だいぶ古い本だ。

がっ、ころころころ……

本から何かが落ちた。

石だ。いや、きれいに光り輝いている。

「これって、先生に届けた方がいいよね。ま、明日でいいか。でも、この本……題名がない。どんな本なんだろう」

本を開きかける。

「ひゃっ！」

足元を白い影が走りすぎた。

幸福のネコだった。この学校に昔から住みついている、白くて毛並みのいいネコだ。みんなそう呼んでいる。

私はふと我にかえた。

「だめ、だめ。早く帰らないと！」

私は本を閉じて走り出した。

「ただいま」

扉を開けるとともに、私より先に白い影が入ったような気がした。家の中を見回したが、何もいない。

ダイニングテーブルには、晩御飯と置手紙があった。

『憂亜へ。今晚、お母さん達は用事です。憂亜がなかなか帰ってこないので、先に出かけます。食器は自分で用意してね。十時には帰ります。

お母さんより』

私はすぐごはんを食べ、宿題と時間割を済ませた。

お風呂に入り、かみを拭きながら部屋に入った。そして、拾った本を手にとり、開いた。中の文字はところどころにじんできていたり、ページが破れていたりして読めるところは少なそうだ。

「そういえば……」

私は、ランドセルの中から拾った石を出した。

不思議な色を眺める。

裏には金でできた留め金がついている。ブローチのようだ。

よく見ると、ちゃんと針もついている。べつに何の変哲もないブローチだった。

「なんだ、つまらない。みんなについていきたかったなあ。あーあ、係の時間にちゃんとやっておけばよかった」

私は、この時間をなんとかやりすごそうと本をぺらぺらとめくり、読みやすそうなところを見つけ、読み出した。

『この本を見つけし者、聖なる空間にむかえられるであろう』

「なんのこと？」

私は首をかしげ、本を枕元に置いた。その時、

「やっと見つけた」

突然の声には私は飛び起き、まわりを探した。

「ずいぶん遠くまできていたんだなあ」

(こんなことありえない) 私は何度も何度も目をこすった。

驚きのあまり声が出ない。

でも、たしかにさっきの幸福のネコがそこにいるのだ。

「幸福のネコが！　しゃべっている!？」

ネコは話し続けた。

「君も一緒に行きたいのかい？」

その時、グニャーと空間がゆがみ、枕元においてあった本に穴が開いて、私はその穴に吸い込まれた。

まぶしくて周りが見えない。

気がつくと私は、ごうごうと渦巻く大きな川に流されていた。

波にもまれながら必死で周りを見た。幸福のネコは、私と同じように流されている。

グンッ

急に流れが速くなった。

川の音にまざって滝つぼの音が聞こえる。

「まずい！」

私はネコを抱き寄せようとした。

だが、もう遅い。一瞬、空中に放り出されると、また流れ落ちる水の中に飛び込んだ。

口を押さえても鼻から水が入り込んでくる。

「苦しい」

意識はだんだんと遠のき、私は気を失ってしまった。

どのくらい眠っていたのだろう。

目を覚ますと、目の前に真っ赤な宇宙人が私の顔をのぞきこんでいた。

「オマエ、ドコカラヤッテキタ？」

私は逃げ出したい気持ちをグッとこらえて、不安げに答えた。

名前も、住所も、ここにくるまでのいきさつを全部話した。

「ソレデ、ソノブローチハ、モッテイルノカ？」

「これです」

「コレハ、アイツノ物ダッタナ。ネコヲ知ッテイルダロウ。コレハ、ソイツノ物ダ。ブローチヲ返シテヤレバ、君モスグモトノ世界ニ戻シテモラエルダロウ。マ、コノ世界デクラスノモ悪クハナイゾ。ハハハッ」

私は、やっとのことでブローチや本やネコがおかしな世界への入り口だったことを理解した。

（どうしてこんなことに……。係の仕事をやっていなかったから？ 用事についていなかったから？ 本を捨てたから？ そんなことはいい。とにかく帰りたい）

「心ハ決マッタヨウダネエ、ユウアサン。タダシ、コノ世界ハトテモ危険ダ。マァ、好キニスルトイイサ」

それだけ言って、宇宙人はふっと消えた。

「ああ、消えちゃった。どこに行けばいいのか、分からない……。どうしよう。でも、これから見知らぬ世界で暮らすなんていや。元の世界に帰りたいな」

私はネコを探して、元の世界へ戻ることを心に決めた。☆

——どれほど歩いただろう。

辺りを見回すと、さっきまで歩いてきた周りの景色と全くちがう。……暗くて、とても気味が悪い。ぐるぐると目が回ってきた。

「あれ？ あれは……」

目がぐるぐる回る中に、ネコのようなかけが見える。

（——ネ、ネコ？ 幸福のネコ！ やっと見つけた）

私は走り出した。あと少しでネコに手が届くと思ったとき、

スカッ

(あれっ? 何で? ネコはどこ?)

ネコの姿は見えなくなった。

「もう。また探さなきゃ。めんどうだなあ」

(——また、どれだけ歩いたらろう)

息も切れてきた。

「どこにもいない。もう、どこに行って——。きゃあ!」

私は、何かに引っ張られたように転んでしまった。

ん? 足? 頭を上げると見知らぬ人がたっている。誰?

「モウ、ムダダネ。ユウアサン。君ハ、モトノ世界ニ戻レナイヨ」

「えっ? きゃあ!」

ものすごくまぶしい光に、私は思わず目を閉じた。

しばらくして目を開けると、辺りは、とてもきれいな花畑だった。さっきまでのうす
気味悪い所がうそのよう。なんだか気分がすっきりして、深呼吸をしようと上を向いた
ら、びっくりして転んでしまった。

「ハハハ、ドジダナ」

今度は、ついこの前会った赤い宇宙人だ。

空中からゆっくり降りてきた。

「コノセカイモ、ワルクナイダロ」

私は、わけが分からなくなって、その場に立ちすくんでしまった。

「コイ」

とりあえず、ついていくことにした。

また何か教えてもらえるかもしれない。

十分くらい歩いたらろうか。来たところはなんと、おとぎ話のようなかわいいお城だ
った。

「表札ヲミロ。ヨメルカ」

『YAMADA YUA』

(えっ?)

私は目を疑った。

(もしかして、ここ私の城?)

そのとき、空から声がした。

「オマエノスキニスルガイイサ」

(あっ、行っちゃった。どうしよう。元の世界に戻る前にちょっと遊んじゃおうかな)

中に入るとたくさんの部屋があった。

私は、一番手前の部屋のとびらを開けた。

広さは、体育館ぐらい。かわいい文房具やおもしろそうなマンガにおかしがいっぱい!
ベッドもすごい!

次の部屋に入ると、今度はごちそう。

(う~ん。おいしそう)

そして、次の部屋は、シンデレラに出てくるような舞踏会の会場だった。

(あれっ? 私の服、いつのまにかドレスじゃないの)

目の前に男の人がいる。私の体はあやつられているかのように、その人のところへ引きつけられた。

(あらっ、マー君?)

声をかけようと思ったら、みるみるうちにその男の人は縮み、白い毛が生え、耳が飛び出した。なんと幸福のネコだ。

「待って！」

かけ出したとき、見知らぬ男の足にまたひっかかった。

「ムダムダ。ユウアサン」

男は手をつかんできた。

(きーっ)

もうおこった。

私は男の手をにぎり返し、うおりゃあと投げた。

(はやく元の世界にもどろう。とにかくネコを探さなきゃ……)

後ろで物音がした。

ふり返ると、男が追いかけてきた。私は、必死で走った。

いつの間にかどんよりした空間の中にいた。

「あっ、ネコ。いた」

ネコをだくと、走りながらブローチを押しつけた。

その時、ゴチンというにぶい音がして、私は気を失った。

「憂垂ー。帰ってるの? 夕飯の片づけ手伝ってー。忙しいんだからー」

(どうということ?)

周りを見回すと、私の部屋だった。

「そっか。私寝てたんだ。それなら今までのことは、全部夢？」

ズキズキと頭が痛い。

ベットからずり落ちて、頭を打ったみたいだ。

いつの間にか本はなくなっていた。けれど、ブローチが置いてあった場所に、その辺に落ちているような真っ黒な石があった。

「憂垂ー。寝てるの？」

台所から聞こえるお母さんの声。

「はーい。今、行くー」

私は、台所へとかけ出した。